

「賀北防衛隊の行動」

柏尾 誠

(当時 35 歳)

賀北防衛隊第一小隊長として、原爆投下直後の爆心地五師団司令部を中心とする地域の警備と救援、遺体の処理活動の実情の概要について。

当時、賀茂郡寺西国民学校教頭在職中、柏尾誠 8 月 6 日正午頃召集令状受理、集結地は西条町の県立西条農学校、寄宿舍の北第一棟を部隊員兵舎として充当した。

8 月 6 日午後賀茂北部隊への召集全員集結総員 200 余名、三ヶ小隊を編成する。一小隊長 柏尾 誠 伍長、二小隊長 三宅 隆 伍長、三小隊長 山口 義則 伍長、部隊長 菅 前任 中尉、中隊長 工月 中尉、中隊事務員 坪島 軍曹 外数名。8 月 7 日早朝、部隊兵舎出発、西条駅発列車に乗車、海田市駅下車（以西は運転不能）徒步行軍、旧山陽道を西進して広島駅前松原通より、広島聯隊区司令部の所在する西練兵場に向わんとしたが、猶余燼消えず通行不能につき、東練兵場より工兵橋経由、広島城搦め手の、つまり裏より進み、広島城天守閣のあった城の本丸、第五師団司令部前に出る。既に東練兵場には広大な練兵場全域に被爆負傷者等で埋めつくされており、饒津神社の前、小高い丘上に救援の病院旗が望見された。西進する路上及び川水等いたる処負傷者と死者が横たわり、偶々真夏の炎天下に、目を被うばかりの凄惨そのものの情景であった。中には息も絶え絶えの重傷者が、通りがかりの私達にしきりに水を求める悲惨な姿をしばしば見かけたが、目的地に急ぐ私たちは立止まる暇もなく、後髪を引かれる思いで通り過ぎた。広島城の本丸に近づき、最も異様に見え感じられた

のは、木造天守閣が、北側の石垣下に聳え立っていた巨大な桧杉など数十本の上に被いかぶさる様に倒れかかっていた事で、後からこの附近が爆心地であったことを知り、このあたり建物など全く跡かたもない焼けあとの中に、全く意外の光景に見えた。又本丸に建てられていた五師団司令部、日清役の時の明治帝の大本営跡も、何れも木造二階建乍ら、北側に倒壊したままで焼けていなかったことの二点は、今もって私は四十年に垂んとするこの長年月中に、その不可解な姿が眼底にはっきり残っている次第である。本丸跡から大手門跡を回り、広島聯隊区司令部に到着したが、これ又西練兵場一帯は、見わたす限り、附近一帯被爆負傷者で足の踏み場もない程横たわり、呻吟している情景は、前述の東練兵場の時と同様であった。聯隊区司令部の表門、これを囲む白壁の大半など跡かたもなく灰燼に帰していたが、門のあった場所に、今日から一週間に亘る広島五師団司令部を中心とする地域の整備と遺体処理（主として軍人軍属の遺体を中心）の、聯隊区司令官の命令を受けるため進み寄ったが、既に司令など聯隊区幹部要員は概ね被爆死した模様で、たしか数人の要員の将校がありあわせのテーブルに天幕をはって、私達部隊の幹部と対応した姿が認められた。門のあたりと思われる処に白い模造紙に広島聯隊区司令部仮事務所と墨書され、そのそばに鬼畜米英云々は、遂に昨8月6日我が広島市に特殊爆弾を投下し、この惨状を生じたことになった云々の墨書を読むことが出来た。特殊爆弾の名称はこれ又異様に私の目に焼きつけられている。

司令部要員からの命令により、8月7日午前10時過ぎから夕刻午後5時過ぎまで前記の命令事項を行動に移したが、何しろ真夏の炎天下の作業で、筆舌に盡し難い難作業で、至る処に掘り作られていた防空壕の上に、燃え残りの木材などを棧にして、あり合わせの担架に遺体をのせ、時に数十体位を一気に火をかけて火葬にする作業は、今考えても正常なもので

はなかったと思っている。広島城を取り囲む石垣の下の濠の中は水が相当あり、その中に軍馬が頭を突込んで体中ふくれ上ったものが何十頭となく見受けられたし、兵舎の中の豚舎から逃げ出して濠に飛びこんだ豚も数知れず見かけられ、又その側あたりに兵隊の遺体が横たわっていたり、この惨状と炎熱のためにただよう異様な臭気には堪え難いものがあった。

夕刻作業を打切り、市内には野営の場所もないので、行軍で相生橋から三篠橋へと三次街道を北進して、安佐郡の長束部落に到り、民家の軒先にムシロを敷き、炊き出しの握り飯をもって野営するという実情で、翌朝は又往路をそのまま南進して広島城辺りに赴き、同じ作業を続行して前後一週間を、軍人等の遺体処理活動に終始して、帰西。西条農学校の兵舎に帰着して同時に召集解除となり、夫々自宅に戻った次第である。

概要をまとまりもなく手記したもので、行動のまにまに見聞きしたことも多々あったが、これ等は省略して、要を得ていないが諒とされたい。

「生き地獄」

中村 芳夫 (当時 18 歳)

広島陸軍兵器補給廠川上常駐班に軍属として勤務していた。8月6日の日も、いつもと変わらずトラックに弾薬を積んで、召集兵 10 人位をその上にのせて兵器庫の前に着いた。その時に B29 だと誰かが叫んだ。その方向を見ると、広島の上空を一機の B29 が飛んでいた。何か落とした。何だろうとその方向を見ていると急にピカッと光った。その瞬間地震のような音がして顔が一瞬熱かった。早速広島の本廠に電話したが通じない。無線連絡をしても応答はなかった。正午頃に怪我人をのせた本廠のトラックが来たので、川上小学校に収容した。重傷者や子供の死体が次々と出たので、寺西の火葬場で焼いた。そんな作業で夜遅く帰ったら、防衛召集令状が来たので、西条農学校に集合して部隊編成して、西条駅から臨時列車で海田へ、海田から行軍で東練兵場へ。途中、皮膚のめくれたやけどの怪我人が後から後から続いた。練兵場に着いたら朝になった。死体がたくさんころがっていた。市内の西の方は火の海だった。途中の川の中には頭だけ出して流れて来る死体を、竹の先にカギをつけて引上げていた。電車の中には白骨の死体が電車と共に焼けただれていた。道路の側溝には頭を溝の中に入れて並んで死体があった。所々にある防火用水の中に飛び込んでたくさん死んでいた。西部二部隊の正門前の大榎木も抜けて飛んでいた。そのそばに召集兵を送って来たのか妊娠中の婦人が倒れて、めくれた裾から赤ん坊が頭を出していたのが今でも忘れられない。広島城の濠の付近から幼年学校あたりの死体整理作業についたが、あっちからもこっちからも、兵隊さん水を呉れ、水を呉れと言って死んで行く大勢の人の声が今も耳の底に残っている。

幼年学校の校庭に、持物のある人は死体の胸の上に持物を置いて並べておいた。持物のない人は10人位を一山にして、ガソリンをかけて焼いた。たくさん転がっている死体を次々集めて整理した。蓮池の中に浮いている死体を引上げるのに、二日目位からはぐっと持上げると皮がぐるりとむけて持上げにくく、顔も体も大きくむくれてなんとも言えない悪臭にはまいった。

こんな作業を昼は繰返して、夜は三篠小学校や祇園小学校に夜営した。破れた水道の水は飲むなどの命令があったので、堀の腐った水で米をたいて作ったむすびを一つずつ貰っても、熱さと残留ガスにやられてとても食べられなかった。そのうちに病気になって申し出ても中々許可がなく、ようやく許可が出たので自宅に帰って養生したが、半年位苦しんだ。

あの広島原爆の数十倍、数百倍の威力のある水爆原爆が競争で作られていると聞く度に、一日も早く核のない平和の世の中に来る事を祈らずにはいられない今日この頃です。

「救援隊として出動」

岡本 順之

(当時名は杉夫 30 歳)

私は8月6日午前8時、川上小学校旧宿直室前で、兵器廠青年学校生徒30名の健民修練生の点呼をして居りました処、爆音と同時に庭の桧がゆれたので海田方面がやられたと思われました。夕方には被爆患者が帰ってこられました。

8月9日夕方、渡辺貢様(当時村役場の助役)から、明10日午前6時西条農学校に集合するよう伝達を受け、出頭しました。直ちに一個中隊を編成し、中隊長は西志和出身の中尉の方でした。軍曹三名で三小隊編成、小隊長は軍曹二名、短現伍長二名、私は指揮班附中隊長となり、私と補充兵一名その他全部19才以下の青年で構成され、総員200名でありました。

直ちに西条6時半の汽車で出発、広島駅で下車。市内を見渡す建物は東警察署、市役所、中国新聞社の洋建築が三カ所見えるだけでした。聯隊区跡に行った処、二部隊も聯隊区も無いので思案して居りましたら、憲兵一名がお出でになったので聯隊区はと伺いました処、現在市役所の一階に少尉殿が一名おられるとの事で市役所に至り、少尉殿の指示で横川線附近に参りました。畑に竹の柱を組んで横にわたし、その上にこうりゃんなどで日除けしてありました。その横には12名の死者が置かれてあります。

私は直ちに西署に行き、火葬させて下さいとお願いしてその夜僧侶二名によって読経をして下さるよう依頼し、火葬致しました。柱四本の上に12名を並べトタンを上置き、石油

一升を柱にかけて火葬しました。一小隊は牛田の病馬の方、他の一小隊は患者収容所、私達は 11 日に天満小学校に中隊本部を移動するよう指示により、一小隊つれて天満小学校に行き、附近の被爆者の手当、死傷者の捜査にあたりました。今でも心残りは天満川で満潮、引き潮に女学生が漂っているのを見ながら、どうにも手のくたしようがなかったことです。

司令部に行く途中県庁橋のらんかんの下敷きになり、自転車に乗った姿で女性が助けを求めているので、暁部隊の副官（少佐）に依頼した処、何かを利用して救助してみるとの事でしたが、結果は聞くことが出来ませんでした。

8月20日原隊に帰隊命令を受け広島駅に集合した処、敗残兵とみなされて全部乗車する事は不可能と思い、小隊ごとに西条に帰るよう命じて、我等四、五名は最後迄残ってのち西農に帰りました。本部の者達ばかりで他には誰もいませんでした。

斯様なわけで、今私は原爆症患者として通院して居ます。広島原爆の様なことが再び起こらないよう、本当に原爆の無い平和な世界を祈るのみであります。